

日産財団ニュースレター (第42号)

2018年8月発行

『第1回リカジョ賞』の各賞が決定いたしました

<グランプリ>

— 盾と副賞 20万円 —

一般社団法人横浜すばいす
理事 古川 三千代 氏

『プログラミング体験でロボットが活躍する未来型キャリアに命を吹き込むのは女子』



写真右 古川 氏

福島県 福島市立渡利中学校
教諭 菅野 俊幸 氏

『震災からの復興と地元産の農作物の風評被害を中学生の女子力で克服する』



写真左 菅野 氏、中央 生徒 2 名

古川 三千代 氏

第一回リカジョ賞グランプリの名誉をありがとうございました。活動を共にする仲間達、学校、地域の皆様、そして2012年度理科教育助成を受けて「理科好き、学習好き」を実現した都岡中学校の関係者と喜びを分かち合いたいと思います。

プログラミング教育を実施した小学生は男女を問わず、「ロボットプログラミング教育」に90%以上が満足の評価を5、4で示してきます。特に女子がリーダーの班は音や形の表現が豊かになる場面を多くみえました。プラモデルを経験していない女子もモノづくりとプログラミングを同時に学ぶ新しい学びに目を輝かせています。

この目の輝きをリカジョ、リケジョにするには、「好きの持続」が大切です。花や虫から原子やAIまで理科の幅は広く深い学びです。低年齢で覚えたこと、体験したことは自転車のように乗らない期間を経ても活用できることは多くあります。身近な理科体験、今はプログラミングを好きでスタートできる環境づくりと、リカジョは幾つになっても好奇心で楽しい人生になると、超高齢化社会にへ威力ですが発信したいと思います。

賞金は子どもらの興味関心をひくAIロボット購入に使用させていただきます。日産財団の皆様、選考委員の皆様、リカジョ賞をありがとうございました。

菅野 俊幸 氏

この度、栄えある「第1回リカジョ賞グランプリ」を受賞できましたことは、地元での復興へ向けて真摯に活動を進めてくれた生徒たち、保護者、さらには多くのご支援、ご指導を頂いた地域の方々のおかげであります。心から感謝申し上げます。

本校は原発事故後、ホットスポットとしてマスコミにも取り上げられ、地元で生活することに不安を感じる日も続きました。事故をきっかけに、多くの生徒が他地区へ避難するなど生徒を取り巻く環境も大きく変わりました。そのような状況の中でも、生徒たちの地元の復興への強い思いを感じながら、その思いをなんとか具現化できないかと考えて取り組んできたのが今回の活動です。本校科学部は「震災からの復興を自分たちの手で」をテーマに6年前から活動を進めてきました。

震災から7年目を迎えた今でも、福島県の農産物に対する風評被害はなくなりません。この問題の克服には、人間の英知と技術、そして愛が必要だと感じています。我々の取り組みはまだ始まったばかりですが、必ず「復興の礎を築くリカジョ」が育ってくると信じております。今回の取り組みを評価いただきました日産財団様に感謝申し上げ、受賞を大きな励みとし、一人でも多くの「愛のあるリカジョの育成」を目指していきたいと考えております。

<準グランプリ> — 盾と副賞 10万円 —

五十嵐 美樹 氏



写真右 五十嵐 氏

科学技術振興機構
日本科学未来館
つながりプロジェクト



写真右
代表受賞者の宮原 氏

公益財団法人日産財団 第1回リカジョ賞の選定 <講評>

選考委員長 西本 清一



【第1回リカジョ賞 グランプリ 2件】

一般社団法人横浜すばいす 理事 古川 三千代 氏:小中学生を対象に、機材・テキスト・指導マニュアル・指導者をセットにした出前授業「課題解決型ロボットプログラミング教室」の実践を通じて、リテラシーとしてのプログラミング技術の習得とロボットの動きを制御する応用展開を含むSTEM人材育成のための総合学習型教育法を普及させた実績は高く評価される。同教育実践において、PC活用によるプログラミングが女子に向いていることを検証するとともに、リカジョ育成に向けた新しいSTEM教育の在り方を提示しており、今後の波及効果が大きいと期待される。

福島県 福島市立渡利中学校 教諭 菅野 俊幸 氏:東日本大震災からの復興をテーマにした夏休みの課題研究において、2名の女子中学生がリカジョの片鱗を示す優れた研究を展開したことに端を発し、理科担当教師の指導と大学との連携などを図りつつ、農作物の栽培を中心とした課題に取り組むレギュラー教育プログラムに発展させており、リカジョ育成の優れた実践になっている。夏休みの課題研究だけでなく、科学部での研究活動への自主参加を含め、女子生徒の意欲が高く、5年間で延べ40名の女子生徒が活動を進めてきており、リカジョが継続的に育成された実績は高く評価される。

【第1回リカジョ賞 準グランプリ 2件】

五十嵐 美樹 氏:初等教育の段階で、学力差は認められないにも拘わらず、STEMに対する女子の意識や意欲は男子に比べてネガティブ傾向を示すことに着目し、科学コミュニケーションの手法を用いて女子の理系離れを改善しようとした取組を展開している。女子を対象とした科学実験の実演や体験を盛り込みつつ、ソフトなアプローチで女子の関心を喚起しようとしており、理系へ進学するリカジョを増やす導入面で一定の効果があると思われる。本格的なリカジョ育成のプログラムも用意してほしいものである。

科学技術振興機構 日本科学未来館 つながりプロジェクト:アジア・太平洋地域の中高校生と日本の女子中高生のコラボを通じて、科学データを根拠に「幸せって何だろう？」のシナリオを構築するワークショップと映像製作、さらに映像作品のコンテストで構成されたグローバルリーダー養成の取組である。日本からの参加者を女子学生に限定したことにより、リカジョ育成に繋がる効果は得られたであろうが、リカジョ育成プログラムとしての積極的なセールスポイントを盛り込む工夫が求められる。

【第2回リカジョ賞の募集がスタートします！】

2018年9月1日より、第2回リカジョ賞の募集を開始します。既に日産財団HPに募集要項や応募フォーマットは掲載していますので、興味のある方は是非、ご応募ください！
(応募〆切: 2019年2月28日)

